

社会科

眞田 裕人 牧田 健太郎

社会科における学び続ける子供とは

社会科における学び続ける子供とは、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、進んで社会的事象に関わり、社会認識を深めていく中で、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする子供である。

1 目指す姿

社会科において子供が学び続けていくためには、社会的事象の見方・考え方を働かせながら概念的知識の獲得に向けて問題解決を積み重ねることが重要である。子供は社会的事象に出会うと、自分の生活経験や既習事項を基にして、社会的事象に関わり始める。そこでは、子供はこれまでの生活経験や既習内容を基にした着眼点から、疑問をもったり予想したりすることを通して、問題意識を高め、解決の見通しをもって社会的事象に関わりを求めていく。そして、問題解決に必要な情報を求めながら具体的な知識を獲得していくことで、根拠を伴った自分の考えをつくり上げていく。問題を解決する過程で自信をもった考えを伝える中で、社会的事象の特色や相互の関連、意味に対する友達と自分の考えとのズレを感じる。そこでは、粘り強く社会的事象や友達と関わり、吟味する過程で自分が納得する考えをつくり上げていく。その中で、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に捉えることで、概念等に関わる知識¹⁾を獲得していく子供の育成を目指す。

2 子供の現状と課題（対話に着目して）

これまでの研究では、社会的事象への知的好奇心を喚起するために、①生活の中で直面する切実な問題（知りたいこと）、②生活経験や既習事項で説明ができない事実、③心情に訴える事実と出会う場を設けた。このことより、社会的事象と十分な関わりをもった子供は、対話を通して「立場」「価値観」等の視点による考えのズレから、その要因を明らかにしていく中で、自ら問いをつくる様相が見られた。「本当に〇〇は、▲▲になっているのかな」「〇〇なのに、▲▲しているのは、どうしてだろう」等、自ら問いをつくらせた子供は、これまでの生活経験や既習内容を基にして、検証可能な仮説を立て、解決のための視点をを用いて検証しようと再び社会的事象に関わった。そして、学習問題（単元を貫いて明らかにしていきたいこと）や学習課題（1時間やその日の授業で明らかにしたいこと）に対するこれまでの考えを、「立場」や「価値観」等を明らかにしながら対話を行うことを通して、「やっぱり〇〇だ」と多角的・多面的な考えに再構築した。

一方で、問いをつくる対話には、解決したいと思える切実感をもたせる必要があった。単元計画が本質に向かう事実を基にしていないと、学びの切実感が希薄になる子供の姿が見られたからである。社会科では、社会的事象が自分の生活経験や既習事項と結び付いていることで解決したい願いが強くなる。地域に応じた教材や単元構成、単元計画を開発することで、子供が教材や単元を身近に感じられるようにしたい。また、問いの解決へ向けた対話では、考えの根拠となる資料、既習内容が解決へ向かっていない子供がいた。子供が本質に向かう事実を獲得できる単元構成や知識・技能の習得が不十分であることが要因だと考えられる。問いの解決へ向けた対話において、子供のそれまでの追究を把握し、どのような考えに至っているかを見取ることで、本質に向かう事実を獲得できるように単元構成を修正することができるようにしたい。

3 対話を通して学び続ける子供を育てるための具体的な手立てと想定される子供の姿

(1) 子供が必要感をもって学習対象と関わるために

- ① 社会的事象との出会いの場や学習を自己決定する場を工夫する

- ・子供が社会的事象に着目し、知的好奇心を喚起するよう、子供が生活の中で直面する切実な問題（知りたいこと）、生活経験や既習事項で説明ができない事実、心情に訴える事実と出会う場を設けたり、体験的な活動の場を設けたりする。その際、社会に見られる課題を解決していく探究的な学びとなるような学習過程を構想する。
- ・生活経験や既習内容を基にした着眼点で問題意識を高め、問題を解決する過程で友達と考えを共有したくなるよう、学習問題を自分ごとにする場、自分に最適な学びを計画^{*2}する場を設ける。その際、互いの価値観の違いを明確にしながらか問題意識を醸成できるようにしたり、既習事項や学び方、教科書等を活用し、子供が自分に適した学びを見いだせるように個々の追究を支援したりする。

② 学習集団の中で自分の立場を意識しながら、社会的事象と十分に関わることのできる場を工夫する

- ・多角的・多面的に事実を捉えることができるよう、ICT環境を整え、資料やインターネットを使つての調べ学習や、見学やインタビューといった学習、追究の視点が共通する友達と情報交換したりする活動等、情報収集する多様な活動の場を設ける。その際、実感を伴って理解し、知識を獲得することができるよう、追究の道筋を記録する表現活動の場を保証する。
- ・自分の考えに自信をもつことができるよう、情報を整理・分析するための場や自己評価する場を設ける。また、問題を解決する過程や学習計画に対する達成度、社会的事象に対する着眼点といった、生活経験や既習内容を基にした個別の追究の成果を共感的に受け止めながら支援する。

(2) 子供が自ら問いをつくるために

① 友達と話し合う必要感を高め、その子らしい着眼点で考えをつくり上げる場を工夫する

- ・子供が自分の考えをつくって友達と対話する必要感を高めることができるよう、問題を解決する過程で、事実に対する考えの根拠や価値観の違いが見えてくる姿を見取り、その違いを発問や板書等で学級全体に見えるようにする。その際、学習課題を共有し、単元や実態に応じて、自分が大切だと思う根拠や価値観を見つめ直して考えをつくり上げる時間を保証する。

② 自分の考えとズレを感じる友達の考えと出会う場を工夫する

- ・誰がどのような根拠や価値観をもって考えをつくり上げ、どのような考えとどのような状況で出会うことでズレが生じるのかを想定し、子供の見取りと想定を重ねた授業を行う。その際、立場や根拠、追究の道筋といった互いの考えの背景を板書やICT機器で見えるようにする。

③ 自分の考えと友達の考えとの異同を明確にし、そこから焦点化された問いを共有する

- ・子供が何に納得し、何に対してズレを感じているのか、考えの背景に見られるズレの要因（立場や視点）を学級全体で十分に探ることができるようにする。そこで、ズレの要因から考えるよさに気づき、考えを見直すよう比較検討の場を設ける。その際、考えを吟味する中でズレの要因から考えに見直しをかけ、学級でよりよい考えを創り上げていこうと問題意識を高められるようにする。そして、子供の言葉で学習課題を焦点化した本質に迫る問いとして共有し、問いを自分ごと捉えることができるようにする。

(3) 子供が自ら問いを解決するために

○ 子供が解決のための視点から仮説を立て、考えを再構築するまでの話し合いの場を構想する

- ・問いをつくった子供が、仮説（検証可能な生活経験や既習内容を基にした表現）を立て、検証方法を見いだすことができるようにする。そこで、解決のための視点から考えるよさについて互いに納得できるような話し合いの場を設ける。その際、既習事項を関連付けて類推する中で、本質に向かう事実を基にした解決のための視点に気づき、その視点から仮説を立てる子供の姿を見取って、考えを吟味できるようにする。そうすることで、子供は、自分の考えに足りない部分は補い合い、「きっと〇〇に違いない」と、自信のある部分はより確かにして、仮説の検証へ向かう。
- ・仮説を検証するために再び社会的事象と関わり、検証から得た事実について共有する場を設ける。その際、互いの考えを聞き合う中で、事実がもつ意味や考えの背景、学習問題－学習課題－問い－仮説の関係性を板書やICT機器で見えるようにし、生活経験や既習内容を基にした納得解を見いだせるようにする。そうすることで、子供は本質に向かう事実の意味に迫る中で、概念等に関わる知識を獲得しながら自ら問いを解決し、学習問題に対する自分の考えをつくり、社会的事象についての概念を再構築していく。

*1価値的知識を含む。*2自分の予想に対して自分に合った解決方法を自己決定し、解決の見通しをもつこと(学習計画)である。